

大学運動部活動の学生スタッフにおける

怒りの発生・表出とその要因について

—半構造化インタビュー調査を用いて—

スポーツ経営組織学ゼミナール 1215126 中村 桜

1. 研究動機・研究目的

攻撃行動に結びつく代表的な感情として、日常誰もが経験する怒りが挙げられている(山口浩, 1996)。このように怒りに対して負のイメージがあるが、怒りと上手く付き合うことができればそれが原動力となり大きな力をもたらすことがある。その現象はスポーツ選手によくみられるが、では大学運動部活部の選手ではなく学生スタッフの怒りの表出方法はどうであるのか。多数の事務的な作業、部活外の時間の拘束に加えて、監督と選手間の軋轢等、感じるストレスは選手より多いと思われる。これらの背景を考慮しつつ、本研究では大学運動部活動に所属する学生スタッフに着目し、怒りの発生・表出、さらにその要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、対象者は大学運動部活動に所属している学生スタッフの3、4年生8名のうち、男性・女性、個人・集団に分けて「活動時のどのような時に怒りを感じるか」「その怒りをどのように対処するか」「気分転換方法」「改善点」「自由口述」という質問の答えに現れる表現や言葉を抜き出し、その言葉や表現を基にKJ法によるグループ編成を行った。

3. 主な結果と考察

KJ法より①不満、②葛藤、③成長、④動機付け、⑤ストレスフリーの5つに分類された。以下4つの点に着目した。

1つ目に、①不満と②葛藤には互いにマイナスの要因があり類似している。自分の非ではないのに怒られるという負の感情が発する場合である。これは他者評価が自己評価より低く自尊心が傷つけられ、自己防衛のために感じる怒りが不満として表れると考えられる。

2つ目に、③成長と④動機付けには互いに因果的であると考え。「チームとして結果が出ているから選手には感謝しているし、自分も大変だけど頑張ろうという気持ちになれる(動機付け)。」我慢が結果につながり(成長→動機付け)、結果が出ているから我慢することができる(動機付け→成長)と説明できる。

3つ目に②葛藤と③成長の関係について、組織の悪い現状を打破したいという気持ちの裏に、無駄だと諦めなければならぬ葛藤が生じるが、これは成長したい気持ちが根底にあるためと言える。「自分でやった方が早く終わると思うけどそれは良くない(成長)。」これは自分で行った方が早いけど相手の成長を考えて我慢することが自身の成長につながっ

ている（葛藤→成長）。自己犠牲ができるこの考え方や傾向は団体競技によく見られる。

4つ目に⑤ストレスフリーについて考える。気分転換に興味に没頭したり部活と離れることが、ストレスが発散につながっている傾向にあった。しかしこれはストレスフリーの状態とは言えない。そもそも怒りを感じる瞬間を質問項目に設定しているため、ストレスを感じない状態の返答は稀であった。しかし、皆無ではない部分は、大学運動部活動の希望の光と言えるだろう。不満と葛藤においては、その問題が起こっている時点でストレスがかかっているため、ストレスフリーとは互いに反対・対立している関係と言える。

大学運動部活動における学生スタッフが怒りを感じる瞬間と対象は様々であった。その表出方法として我慢や気分を紛らわすという昇華行動が多く見られた。このようなことから共通して言えることは、チームとしてあるいは個人的にスタッフとして成長し、勝利に貢献したいからという意思が強いと言える。スポーツに携わっている以上勝敗が重視され、大体の組織が勝つことを目標に活動している。それはスタッフ、選手関係なく全員の共通認識である。その目標があるため、怒りを感じてもその組織にとどまることができるのであろう。さらに、KJ法の過程において、ストレスフリーは分類ができず単体であった。これより、運動部活動に所属している学生スタッフにおいてストレスを感じない環境というのは極めて稀であるということが言える。大学運動部活動の組織においてストレスや怒りを滅亡させるということは不可能であるが、その中でも怒りの強度や回数を軽減させることは可能である。

最後に、スタッフを経験していない選手にすべてを理解してもらうことは難しい部分があるが、選手は勝利に直接貢献することが、日ごろのサポートへの恩返しになるのではないだろうか。スタッフも現状の中でより良い環境で大学運動部活動が運営されるようにどのようにすればよいか考えながら行動することができたら、より高次元の自己成長につながると感じる。

4. 結論

本研究の結論は以下の3点である。

1. 大学運動部活動における学生スタッフの怒りの発生、表出とその要因は①不満、②葛藤、③成長、④動機付け、⑤ストレスフリーに影響を及ぼしている。
2. 学生スタッフを感じる大部分は、他者評価が自己評価より低い場合に自己防衛として怒りが生じる。
3. 様々な怒りを感じながらも学生スタッフとしての継続意欲が湧くのは、勝利に貢献したいという意思が強いためである。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたり、お忙しい中多くのご指導、ご鞭撻をいただきました水野基樹先生をはじめ大学院生の方々に心から感謝申し上げます。そして自身の卒業論文や部活動等で忙しい中、インタビュー調査に快くご協力してくださった順天堂大学の仲間、後輩に深く感謝申し上げます。皆様のご協力なしには本論文の完成に至りませんでした。本当にありがとうございました。